

## インド密教における結界法

—Vajrāvālī-nāma-maṇḍalopāyikā和訳(2)—

森 雅 秀

### 1. はじめに

1.1 なんらかの形で宗教にかかわりをもつものたちにとって、均質で連続的な世界は存在しない。彼らにとっての現象世界は、密度の異なる非連続的な複数の空間によって構成されている。宗教行為においては、空間のもつこのような密度のちがいがつねに意識されている。たとえば、寺院や神殿などの宗教的建造物によって作りだされる空間は、日常的な空間とは異質なものであり、その中で行われる儀礼や祭式は、つねにこのような質のちがいを前提として実践されている。宗教的建造物の内部には、聖域とよばれるようなさらに密度の濃い空間があることも多い。聖地や巡礼地、あるいは墓地や葬場などの特定の空間が、日常的な空間とは異質な宗教的な密度をもつことは容易に理解される。

このような宗教的な意味をそなえた空間が、日常的な空間の中に存在するためには、両者のあいだに境界が設定されなければならない。境界をはさんだ二つの空間のあいだでは、宗教的な密度のちがいは連続的には推移せず、一種の断絶がある。あるいは、このような境界の設定は、宗教的な意味をもつ空間をあらたにつくりだすことと言いかえることもできる。創出される空間は、宗教的建造物のように恒常的、半永久的なものもあれば、一定期間維持されたあとでとりはらわれる、一時的、暫定的なものもある。後者の例として儀礼空間や祭祀空間などの宗教実践の場があげられる。恒常的な空間の中に暫定的な空間をつくる場合もしばしばある。寺院などの宗教的建造物の一部で儀式が行われるケースがこれにあたる。この場合、日常的な空間とは異質な空間に、さらに別の密度をもった空間をつくることになる。

宗教的な意味をそなえた空間にかかわりをもつ人間は、そこが特別な空間であることを意識してふるまわなければならない。たとえば、衣服をととのえる、着替える、身を浄めるなどの行為は、その基本的なものである。このような行為によって、空間のもつ意味のちがいを自分自身が認識するとともに、他者に対しても、自分がそのことを十分認識していることを示す。

宗教的な空間へのかかわりをもつ者にさまざまな規定や禁忌事項の遵守が求められるだけでなく、かかわることのできる人間そのものを制限することも多い。たとえば、聖職者のみがそのような空間に入る資格をそなえていたり、社会の一集団のみが関与できたり、あるいは特定の集団を排除する場合がある。最後のケースのように、空間への他者の侵入を嫌う現象はし

ばしばみられることである。男性、女性いずれかの性が排除される場合や、未成年者を排除したり、異教徒のように同一の共同体に属しないものにこのような排除の精神が適用されたりする。この時、「不浄」や「ケガレ」などの宗教的、あるいは社会的なイデオロギーがしばしば援用され、排除されないものたちに共通のアイデンティティーが生じることはいうまでもない。

宗教的な意味をもった空間の設定を目的とする宗教行為を、ここでは「結界法」とよぶことにしよう<sup>(1)</sup>。もともと「結界」ということばには、このような特殊な空間そのものと、空間と空間のあいだの境界の両方の意味が含まれる。また、これらの空間や境界を設定する行為を指す場合にも用いられる。もちろん、明白な結界法を行わずに空間が設定されることもある。しかし、すでに述べたように、特別な空間であることを意識した行為やことば、制度などによって、そこが特別な空間であることは示されている。禁忌事項や排除の精神はその一部である。

ここでは、インド密教においてどのような結界法が行われていたかをマンダラ(maṇḍala: 曼荼羅)という特別な空間をつくりだすために、そのまわりに境界を設定する手づきを具体的な例にとって明らかにしよう。

1.2 インド密教ではどのような結界法がおこなわれたであろうか<sup>(2)</sup>。經典や注釈書、儀軌類などの諸文献をてがかりに、その変遷をたどってみよう。

インド密教では、供養法や灌頂などの儀式の「装置」としてマンダラがしばしば制作された。当時のマンダラは地面の上に顔料などを用いて描かれる「土壇マンダラ」である。マンダラが制作される場合、マンダラが描かれる区画をそれ以外の空間から区別するためにさまざまな方法がとられた。そのような方法のひとつとして、マンダラを描く区画の周囲に糸をはりめぐらせるという方法がしばしば用いられた。とくに、初期、中期の密教に属する漢訳經典類にあらわれる。

たとえば、所作タントラの代表的な經典のひとつである『蕤呬耶經』(大正蔵, No. 897, p. 764ab)は、外院、第二院、最内院の三重の矩形からなるマンダラを説くが、各院の四隅に木製の小杭をたて、これを糸でつなぎ、その内部を結界する。マンダラの中心から見れば、糸で囲まれた三重の空間が外側に向かってひろがることになる。各院をとり囲む糸には、五智如来を象徴する五色の糸が用いられる。同じような三重の結界法は『大仏頂広聚陀羅尼經』(大正蔵, No. 946, p. 169b)にもあらわれる。同經では糸をとめる小杭は木製のものだけでなく、銅や鉄の金属製のものもあげられている。

もちろん、より単純な形態として一重の糸の結界法もある。『仁王護国般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌』(大正蔵, No. 994, p. 515c)が説く結界法などがそれにあたる。マンダラを制作する壇の四隅に小杭をたて、その内部を糸でとり囲む。同じく一重の結界であるが、『不空羼索神變真言經』(大正蔵, No. 1092, p. 369a)は、糸をつなぐ小杭を四隅だけではなく、四門、すなわちマンダラの四方にも立て、八箇所で五色の糸を固定するよう説いている。

ところで、糸をとめるために用いられる小杭は「キーラ」(kīla)あるいは「キーラカ」(kīlaka)

とよばれる。漢訳經典では「榘」あるいは「金剛」の語を冠して「金剛榘」と訳される<sup>(3)</sup>。キーラが結界法に用いられたのは、単に糸を固定するためだけではなく、キーラ自身にも呪術的な機能があったためと考えられる<sup>(4)</sup>。

呪術的な儀礼でのキーラの使用例はヴェーダにもとづく家庭内祭式を説く『家庭経』*Gṛhyasūtra*においてすでに認められる。敵の侵入を防いだり、使用人の逃亡を防ぐために、木製、あるいは金属製のキーラが地面に打ちこまれた (Gonda 1980 : 325-326)。呪術的な機能をもつキーラの使用は漢訳經典類にもしばしば見出される。『妙吉祥最勝根本大教経』(大正蔵, No. 1217, p. 87a) や『聖迦枳忿怒金剛童子菩薩成就儀軌経』(大正蔵, No. 1222, p. 108c) には、呪殺のためにキーラが用いられる。呪殺の対象となる人物を形どった像の上にキーラが打ちこまれる。このようなキーラは木ばかりではなく人骨からも作られる。また、請雨法や止雨法が行われる場合も、雨をつかさどると考えられたナーガ (nāga) が棲む池の周囲にキーラが打ちこまれた<sup>(5)</sup>。

これらのキーラはカディラ (khadira) という樹木から作られることがもっとも多い。カディラの和名はアセンヤクノキで、「佉陀羅」「佉達羅」などと漢訳される。呪術的な目的の場合には人骨や鉄のキーラが使用されることもあるが、マンダラの周囲に糸を固定するために打たれるキーラにはカディラ樹が用いられることが圧倒的に多い。キーラの長さはアングラ (aṅgula : 指量, 1 アングラは約 2 センチ・メートル) とよばれる単位で示され, 4, 8, 12, 16 の各アングラが文献にはあらわれる。このうち 8 アングラのキーラの使用が最も多い。

マンダラの結界法においても、糸を用いずキーラのみを利用したものがある。『一字仏頂輪王経』(大正蔵, No. 951, p. 246c) の説くマンダラ結界法では、カディラ樹から作った 9 寸のキーラ四本を壇の四隅に打つことが述べられているが、まわりに糸をめぐることは説かれていない。

キーラを用いた結界法は、マンダラの場合に限らず、行者が何らかの修行法——たとえば護摩 (homa) や供養法——を行う時に、行者の周囲の空間を結界するためにもしばしば行われる。『陀羅尼集経』(大正蔵, No. 901, pp. 809c-810a) は、地上、地下、虚空の魔を退散させるためにカディラ樹のキーラを四隅にたてることを説く。『瑜伽大教王経』(大正蔵, No. 890, p. 572bc) も「除魔法」とよばれる類似の方法を紹介する。『五仏頂三昧陀羅尼経』(大正蔵, No. 952, p. 272b) の場合、キーラを地面に打つ前に、キーラに囲まれる区画に白芥子と灰を塗って浄化する。このような、地面そのものの浄化をともなった結界法の例は、他の經典にもしばしばあらわれる<sup>(6)</sup>。

キーラを用いた結界法がより複雑なプロセスの供養法の一部となることもある。また、密教儀礼における瞑想技術の発達とともに、実際にはキーラを用いず、瞑想の中で結界を行う方法もあらわれるようになる。供養法の儀式次第として体系化された「十八道次第」にみられる結界法、すなわち結界法と護身法はその一例である。十八道次第は『無量寿如来儀軌』(大正蔵,

No. 930) や『如意輪念誦法』(大正蔵, No. 1085) などでもみられるが, もっとも整備されたかたちは恵果の『十八契印』(大正蔵, No. 900) に示されている。

同書によれば, 行者は自分のからだを甲冑で武装したあと, 金剛槌(キーラ)をうち, このまわりに金剛牆をはりめぐらせる。これらはいずれも瞑想の中で行われる。この場に供養の対象である尊格を迎え入れた後, まわりを金剛網でおおい, さらに金剛炎で防御する。

ここに示されているのは, 行者の身体を中心に, 甲冑, 金剛槌, 金剛牆, 金剛網, 金剛炎というさまざまな防御壁をいく重にも重ねた結界法である。キーラによる結界もこの防御壁の一部を形成している。

一方, 瞑想技術の発達は, 特定の尊格が行者にかわって瞑想の世界でキーラを打つという独特の結界法を生み出した。『秘密集会タントラ』*Guhyasamājatantra*の聖者流のテキスト『成就法略集』*Piṇḍīkṛtasādhana*では, スンバラージャSumbharājaとよばれる忿怒尊が, 儀礼の遂行を妨げる妨害者(vighna)をキーラを用いて固定するという観想法が説かれる。この時, 観想されるキーラ自体もアムリタクンダリンAmṛtakuṇḍalinという別の忿怒尊が姿をかえたものとされている(Poussin 1896: 1)。

これまで述べてきた結界法は, 現実のものにせよ, 瞑想上のものにせよ, いずれもキーラが用いられてきたが, 密教における瞑想技術の発達は, 別の方法による結界法を生み出した。守護輪(rakṣācakra)の観想がそれである。守護輪は立体的な構造をもった車輪状の武器で, 行者はこれを観想することによって, その内部の空間を護衛する。守護輪は十本の輻をもつことから十輻輪(daśāracakra)ともよばれる<sup>(7)</sup>。輻の一本一本には, 十忿怒尊<sup>(8)</sup>(daśakrodha)と総称される十尊の忿怒尊がのる。十忿怒尊の名称と位置はつぎのとおりである。ヤマーンタカYamāntaka(東), プラジュニャーンタカPrajñāntaka(南), パドマーンタカPadmāntaka(西), ヴィグナーンタカVighnāntaka(北), アチャラAcala(北東), タッキラーージャṬakkirāja(南東), ニーラダダNiladaṇḍa(南西), マハーバラMahābala(北東), ウシュニーシャチャクラヴァルティンUṣṇīṣacakra(vartin)(上), スンバSumbha(下)。守護輪の観想による結界法は, 『成就法略集』をはじめとする『秘密集会タントラ』系の文献にしばしばあられ, 父タントラの各流派において流行した結界法であったと考えられる。

インド後期密教ではマンダラそのものの観想もおこなわれた。瞑想によって創出された観想上のマンダラも, 実際に地面に描かれたマンダラと同様, 結界を必要とした<sup>(9)</sup>。ここで利用された結界法が, 行者の結護法と守護輪の観想である。11世紀から12世紀にかけて活躍した学僧Abhayākara(gupta)によるマンダラ観想法に関する手引書*Niṣpannayogāvalī*(NPY)には, マンダラの外郭部の観想方法がつぎのように規定されている(Bhattacharyya 1972: 1)。

地の下方のはしまで堅固で強固なところに, 望むだけの大きさの光かがやく金剛の自性の大地と, 劫末の炎がかがやく火炎輪をともなった境界と, 地の下端から天頂にいたるまで

のとても高く堅固で光かがやく金剛牆 (vajraprākāra) がある。金剛牆の上にとぎれることなく一体となった金剛網 (vajrapañjara) がある。金剛網の上には金剛の矢 (vajraśara-jāla) が、下には金剛の天蓋 (vajravitāna) が飾りつけられている。その中にある二重蓮華と日輪の上には、右まわりに回転する黄色い十輻輪 (=守護輪) がある<sup>(10)</sup>。

このあと、守護輪にのった十忿怒尊の図像学的特徴の説明がつづく。

はじめに観想される要素の中で、火炎輪、金剛牆、金剛網は、すでに述べた行者の結護法において生み出された防御壁を外からながめたものと同じである。これらは、マンダラ全体の「容器」として、マンダラの尊格が位置する楼閣 (kūṭāgāra) を保護する役割をになっている<sup>(11)</sup>。

マンダラ観想法にみられる結界法には、キーラは登場しなかった。しかし、金剛網などの防御壁の一部としてはキーラはあらわれないが、実はキーラによる結界法は守護輪の観想の中にくみこまれている。そして、実際に地面にマンダラを描く時にも、キーラは結界のために利用される。つぎで紹介するインド後期密教の結界法はそのような例のひとつである。

1.3 NPYの著者であるAbhayākara Guptaは *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* (VA) とよばれる大部のマンダラ儀軌を著している。同書にはキーラを利用した結界法が紹介されている。著者みずからが同書のはじめにあげる全体の50の項目の中で第8番目に位置するVighnakīlanavidhiがこれに相当する<sup>(12)</sup>。マンダラを制作する準備段階として、Bhūmiśodhanavidhi(土地の浄化の儀軌)、Bhūparigrahaavidhi(土地の掌握の儀軌)につづいて行われ、これによってマンダラを描くための土地の整備を完了する。次章で行ったのはこの部分の全訳である。

Vighnakīlanavidhiは直訳すれば「妨害者にキーラを打つ儀軌」である。この章よりあとで解説されているマンダラの制作と灌頂などの一連の儀式において、その進行を妨げると考えられた妨害者をキーラで固定するために行われる。妨害者には護方神とよばれるヒンドゥー教の神がみがあげられている<sup>(13)</sup>。守護輪と十忿怒尊を観想し、彼ら十忿怒尊が妨害者たちを固定する。同時に、観想する主体である師 (ācārya: 阿闍梨) 自身も、マンダラを描くために用意された区画のまわりに、実際にキーラを打ちこむ。瞑想上の十忿怒尊の行為を、師が現実の世界で演じているという構図となっている。実際にキーラを打つ方法は二種類紹介されている。両者のちがいはキーラを打つ順番と、その時、師によって唱えられるマントラで、それ以外の観想法の部分は共通である。全体にさきがけ、十忿怒尊を眷族として周囲に配したヴァジュラフーンカーラ Vajrahūṃkāra とよばれる忿怒尊のマンダラが観想される<sup>(14)</sup>。

Vighnakīlanavidhiで行われる行為を箇条書きにして列挙するとつぎのようになる。

- (1) 金剛網などを観想する
- (2) ヴァジュラフーンカーラを観想する
- (3) 十忿怒尊を観想する
- (4) キーラに関する説明

- (5) 妨害者にキーラを打つ (第一の方法)
- (6) 妨害者が取り除かれたことを確認する
- (7) 妨害者にキーラを打つ (第二の方法)
- (8) 補足的な説明

(1)の金剛網などの観想では、種子マントラから金剛杵を生み、これから金剛墻、金剛網、矢の束、天蓋を生み出す。同時に下方にも金剛杵のできた大地を観想する。これらは、すでに述べたように、NPYの第1章の冒頭にみられたマンダラの外郭部の構造に一致している。Abhayākara Guptaは同じ第1章の中で、マンダラの楼閣のまわりに必ずあるものとして「金剛地などの金剛網」をあげている (Bhattacharyya 1972: 4)。この場合の金剛網は金剛墻や天蓋、矢の束、金剛杵のできた大地を含む、マンダラの外郭部の総称として用いられている。実際、NPYには合計26種類のマンダラが紹介されているが、金剛網はこれらのマンダラのすべてで観想するよう指示されている。このVighnakīlanavidhiで観想されるヴァジュラフーンカーラのマンダラもその例外ではない。

(2)では、この外郭部の中央にヴァジュラフーンカーラが観想される。ここにあげられているヴァジュラフーンカーラの図像学的特徴の記述は、NPYの第11章「ヴァジュラフーンカーラ・マンダラ」の中尊のそれとほとんど同じである<sup>(15)</sup>。ヴァジュラフーンカーラ・マンダラは、ヴァジュラフーンカーラを中心とし、そのまわりに10尊の眷族を配した11尊からなるマンダラである。周囲の10尊の名称と位置はつぎのとおりである。ヴァジュラダグダVajradaṅḍa(東)、アナラールカAnalārka(北)、ヴァジュラ・ウシュニーシャVajroṣṇīṣa(西)、ヴァジュラクンダリンVajrakuṇḍalin(南)、ヴァジュラヤクシャVajrayakṣa(南東)、ヴァジュラカーラVajrakāla(南西)、マハーカーラMahākāla(北西)、ヴァジュラビーシャナVajrabhīṣaṇa(北東)、ウシュニーシャチャクラヴァルティンUṣṇīṣacakravartin(上)、ヴァジュラパーターラVajrapātāla(下)。

ヴァジュラフーンカーラは、VAのVighnakīlanavidhiの中では「金剛薩埵を本質とし、トライローキヤヴィジャヤという異名をもつ」といわれている。トライローキヤヴィジャヤは、ヨーガ・タントラの代表的経典『真実撰経』*Tattvasaṃgraha* (『初会金剛頂経』)の第二品「降三世品」に登場する。ここでは、仏教の教えにしたがわないヒンドゥー教の神マヘーシュヴァラMaheśvaraが金剛手Vajrapāniによって調伏される<sup>(16)</sup>。この時、金剛手は忿怒の形相をとり、トライローキヤヴィジャヤという名称でよばれる (堀内 1983: 340)。また『真実撰経』の第一品「金剛界品」では、金剛手の灌頂名として「金剛薩埵」の名が金剛手に与えられる (堀内 1983: 32)。VAの結界法において、妨害者としてのヒンドゥー教の神がみを調伏するという機能は、すでに同経で準備されていたのである。

ただし、NPYのヴァジュラフーンカーラ・マンダラは母タントラ系の経典*Abhidhānottara-*

*tantra*にもとづいたマンダラである。この經典にはヴァジュラフーンカーラ・マンダラの11尊の名称と中尊の特徴に関する記述が含まれる<sup>(17)</sup>。

また、教学上はヴァジュラフーンカーラとトライローキヤヴィジャヤは同一視されるが、図像学的には前者が一面二臂、後者が三面六臂というように、ことなつた形態で表現される(森1990:72-74)。

(3)の十忿怒尊の観想では、ヴァジュラフーンカーラの胸からヤマータカをはじめとする十忿怒尊が生み出される。十忿怒尊の具体的なすがたは、Abhayākara Guptaの自著 *Āmnāyamañjarī* を参照するように Vighnakīlanavidhi のおわりに指示される。*Āmnāyamañjarī* は *Samputatantra* に対する浩瀚な注釈書で、実際に十忿怒尊の図像学的特徴に関する記述が含まれる<sup>(18)</sup>。

ところで、NPY第11章のヴァジュラフーンカーラ・マンダラでは、中尊のまわりの10尊はヴァジュラダダなどであつて、十忿怒尊ではなかつた。しかし、Abhayākara Guptaは同じ11章の中で、ヴァジュラダダをはじめとする四方と四隅の8尊は、ヤマータカ以下の十忿怒尊のはじめの8尊と同一の尊格であるという見解を示している。また、下方に位置するヴァジュラパーターラは十忿怒尊の下方の尊格スンバを別名とすると述べる。上方の忿怒尊はいずれにおいてもウシュニーシャヴィジャヤであることから、このマンダラの周囲の10尊は十忿怒尊と同一視されていたといふことができる。

さらに、Abhayākara Guptaは、実際にマンダラを観想する場合、ヴァジュラダダ以下の10尊ではなく、十忿怒尊そのものをかわりに観想してもよいとNPYの第11章の末尾で補足している。そして、この場合の十忿怒尊の特徴は、NPYの第1章「文殊金剛マンダラ」、第2章「阿閼マンダラ」、第3章「金剛薩埵マンダラ」の三つのマンダラに含まれる十忿怒尊の記述のいずれかを参照するよう規定している。これら三つのマンダラにあらわれる十忿怒尊はそれぞれことなつた図像学的特徴をもつ<sup>(19)</sup>。前に述べた *Āmnāyamañjarī* の説く十忿怒尊、すなわち、Vighnakīlanavidhiで観想される十忿怒尊は、三番目の「金剛薩埵マンダラ」に説かれた十忿怒尊と同じ特徴をもつ。これは、*Āmnāyamañjarī* においてAbhayākara Guptaが注釈を加えた *Samputatantra* がNPY第3章の典拠となっていることを考えればむしろ当然である。

以上を総合すると、VAのVighnakīlanavidhiで観想されるヴァジュラフーンカーラと十忿怒尊からなるマンダラは、NPYの第11章で説かれるマンダラの中の、*Samputatantra* の十忿怒尊をまわりに配したヴァジュラフーンカーラ・マンダラということになる。

(4)で説明されるキーラの特徴は、観想上の十忿怒尊が手にするキーラの特徴であると同時に、実際に師が地面に打つキーラにもあてはまるものである。

長さには18, 12, 8アングラの三説をあげ、幅はそれぞれの3分の1の大きさとなっている。材質はカディラ樹、骨、鉄のいずれかを選ぶ。各キーラには香料が塗られ、五色の糸と赤い花輪が結わえられている。キーラの上の半分は、キーラを手にする忿怒尊自身のすがたをしてい

るとも述べられている<sup>(20)</sup>。

各忿怒尊は左手にキーラを握り、右手にはそれを打つ鎚を持つよう観想される。これは実際にキーラを打つ時の師のすがたでもある。

キーラを実際に打つ方法には二種類ある。このうち、(5)の第一の方法では、十忿怒尊が十方で妨害者を穴に入れ、キーラで固定する様子を観想し、師自身も特定のマントラを唱えながらマンダラのまわりにキーラを打つ。この時のマントラは『真実摂経』や『秘密集会タントラ』を典拠としている<sup>(21)</sup>。キーラを打つ順番は「北東の隅からはじめて右まわりに」と説かれており、北東、東、南東と右まわりに移動しながら、まず八方で順にキーラを打つ。上下二本のキーラは、それぞれ東と西のキーラの外側に打たれる。これは、立体的な構造をもつマンダラを二次元的な平面に移しかえる時に、上下の2尊をおく場合と同じ処理の方法である。

(6)の妨害者がとりのぞかれたことの確認は、キーラを打つことによって「上方も下方も四方も、鉄囲山(cakravāḍa)にいたるまで、世界のすべてのところから妨害者が取りのぞかれたと固く確信せよ」と述べられる。鉄囲山とは、スメール山(sumeru：須弥山)を中心とした伝統的な仏教宇宙観において、世界の最外周をとりまいていてと考えられた鉄製の山脈である。VAには、観想上のマンダラの外郭部である金剛墻や、実際のマンダラの外周に描かれる金剛杵輪(vajrāvalī)が鉄囲山と同一視される記述がある(TTP, No. 3960, Vol. 80, 92, 3, 4)。観想上のマンダラにせよ、実際のマンダラにせよ、マンダラという空間が現実の大宇宙と相同化されるという観念がここに認められる。

(7)で説かれる第二の方法は、(5)の第一の方法において唱えられるマントラと、キーラを打つ順序とに変更が加えられる。マントラは、各忿怒尊に対して、ヒンドゥー教の護方神に代表される妨害者をキーラで固定するよう命ずる内容をもつ。これにともない、キーラを打つ順序も、東南西北の四方を打ってから、南東以下の四隅を打つことになる。最後に打たれる上下二本のキーラ的位置は前と同様である。「これ以外の部分は第一の方法と同じである」という記述があることから、(5)の第一の方法のかわりに(7)の方法を実行し、(6)の確認へとつづくことになる。

(8)の補足説明では、まず、キーラの本数が十本ではなく四本の説があることを紹介し、これを四隅に打つ場合と四門(四方)に打つ場合があることを述べる。つづいて、十忿怒尊と妨害者(実際はインドラなどのヒンドゥー教の神がみ)の特徴、守護輪の観想法は*Āmnāyamañjari*を参照するよう指示する。さいごに、キーラが手に入らなかった場合の結界法を説明する。実際にキーラを打つまでの観想法は同じで、キーラを打つかわりにきわめて簡単な方法が述べられる。



## 2. 和 訳

## 注 記

- 1) 以下に行ったのは Abhayākaragupta 著 *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 中の Vighnakilanavidhi のサンスクリット・テキストの和訳である。
- 2) 和訳は現存するサンスクリット写本にもとづいて筆者が校訂したテキスト(未刊)によった。サンスクリット写本については、森(1991: 57-59) 参照<sup>(1)</sup>。各写本の該当箇所は以下のとおりである。(1)13b, 2-15a, 6; (2)12a, 3-13b, 3; (3)17a, 1-19a, 6; (4)22b, 6-25a, 6; (5)16b, 1-18b, 2; (6)19a, 5-22b, 1; (7)13a, 6-15b, 1; (8)20a, 1-21b, 5; (9)15a, 2-17a, 1; (10)13b, 2-15a, 4; (11)17a, 6-19b, 2; (12)16a, 5-7a, 7; (13)33, 2-37, 5。このうち(8)は第22葉以下が欠落しているため、章の途中までである。また残存箇所も損傷がはげしいため判読困難な部分が多い。
- 3) 和訳に際してはチベット訳テキストも参照した。サンスクリット・テキストとチベット訳との読みのちがいは注記した。チベット訳テキストの該当箇所はつぎのとおりである。(1)北京版: 86, 4, 5-87, 3, 2; (2)デルゲ版: 13b, 6-15a, 5; (3)ナルタン版: 16a, 4-17b, 6。
- 4) サンスクリット写本(1), および北京版チベット訳テキストとの対応を文中に示した。S14a はサンスクリット写本(1)の第14葉表面の始まりを, T86, 5 は北京版テキストの第86頁第5葉の始まりをそれぞれ示す。
- 5) 内容の理解をはかるため( )内に説明の語句, 原語などを入れた。内容に応じて段落を分け, 見出しをつけた。翻訳上補った語句は〔 〕内に入れた。

〔妨害者にキーラを打つ儀軌<sup>(2)</sup>〕

## ヴァジュラフーンカーラの観想

つぎに、早朝に起き、生類を持金剛<sup>(3)</sup>Vajrabhṛtのもとへみちびくため、妨害者をとりのぞこうと決意する。

空性(sūnyatā)をすみやかに変化させて「ラン<sup>(4)</sup>」(raṃ)の文字にし、そこから日輪を生じさせる。その日輪の上にある「フーン」(hūṃ)という文字から二重金剛杵<sup>(5)</sup>(viśvavajra: 羯磨杵)を生む。この二重金剛杵の上にある「フーン」という文字の発する光からかがやく金剛杵を生む。この金剛杵を拡大することによって、金剛塔と〔金剛〕網、矢束、天蓋を観想する<sup>(6)</sup>。これらは、とぎれることのないひとつのかたまりとなっている。また、下方にはまぶしくて見つめることのできないほどに光かがやく二重金剛杵からできた大地を観想する。

その中央に、金剛薩埵Vajrasattvaの本質をすみやかに変化させることによって、トライローキヤヴィジャヤ Trailokyavijaya (降三世)という異名をもつヴァジュラフーンカーラ Vajrahūṃkāra (金剛吽迦羅)を観想する<sup>(7)</sup>。

ヴァジュラフーンカーラは二重蓮華<sup>(8)</sup>(viśvapadma)と日輪の上に立ち、バイラヴァ Bhairava と (T86, 5) カーララトリ<sup>(9)</sup>Kālarātri とを展右<sup>(10)</sup>(āliḍha)の姿勢で踏みつける。忿怒の

形相をし、劫(kalpa)の終わりにあらわれる炎のようにかがやく光のかたまりとなり<sup>(11)</sup>、妨害者の群れをすべて呑みこまんばかりである。中央、右、左の順に青、黄、緑の色の三つの面をそなえる。大きく口を開き、牙をむき、だらりと舌をたらす。それぞれの顔は、眉間にしわをよせ、眉毛はおれまがり、赤くて丸い三つの眼をそなえる。六種の装身具<sup>(12)</sup>をつけ、額には五つの頭蓋骨を飾り、首には血のしたたる生首の環をかける。人間の頭をつけた腰巻と虎の皮を身につける。青色をしたアナンタ Ananta で留めた褐色の髪はさかだち、タクシャカ Takṣaka をはじめとする(S14a)八匹のナーガ(nāga)の王たちを装身具とする<sup>(13)</sup>。金剛杵と金剛鈴を持った両手は、両方の金剛拳(vajramuṣṭi)<sup>(14)</sup>の甲をあわせ、小指をからませ、ひとさし指をのばすという降三世印<sup>(15)</sup>(trailokyavijayamudrā)を結びながら、自分自身と同じような姿をした明妃を抱擁している。[残りの]右の手には鉤(aṅkuśa)と羂索(pāśa)を、左の手にはカパーラ(kapāla:頭蓋骨でできた容器)とカトヴァーンガ(khaṭvāṅga:先端に髑髏のついた杖)を持つ。「フーン」という忿怒の声をひびかせて四方を眺める。

### 十忿怒尊とキーラの観想

[ヴァジュラフーンカーラは]自分の胸にある「フーン」という文字から発した光によって、十方にいる妨害者をひきよせ、この「フーン」という文字から拡散した十忿怒尊(daśakrodha)にひきわたす。

これらの忿怒尊は、長さが18アングラ(aṅgula)、12アングラ、あるいは8アングラ、幅が順に6、4アングラ、もしくは2.5アングラ強のいずれかのキーラを持つ<sup>(16)</sup>。キーラはカディラ樹、骨、鉄のいずれかでできており<sup>(17)</sup>、新しい容器に入れられ、白芥子と赤梅檀が塗られ(T87, 1)、五色の糸が巻かれている。十本のキーラは供養され、一本一本に赤い花輪が結わえられていると観想せよ<sup>(18)</sup>。キーラの中心より下の部分は鋭く先端がとがり、上の部分は[忿怒尊]自身の姿をしている<sup>(19)</sup>。

各忿怒尊は、劫の終わりの炎のように光かがやくキーラを左の金剛拳によって握り、右手には、第一の[手にもつ]持物<sup>(20)</sup>を、赤い花輪を結わえた鎚に形をかえて、これを握る。

### 第一の方法

[十忿怒尊は]長くのぼして発せられた「フーン」という声によって生じた十個の穴に妨害者を入れ、

oṃ vajrakīla kilaya sarvavighnān hūm<sup>(21)</sup>

あるいは、

oṃ gha gha ghāṭaya ghāṭaya sarvaduṣṭān phaṭ phaṭ kilaya sarvapāpān (S14b) phaṭ

phaṭ hūṃ hūṃ hūṃ vajrakīla vajradharo ājñāpayati sarvaviḡhnānāṃ kāyavākcittaṃ  
kīlaya hūṃ hūṃ phaṭ<sup>(22)</sup>

とはじめに唱えて、〔妨害者の〕頭にキーラをつきさし、

oṃ vajramudgara ākoṭaya hūṃ<sup>(23)</sup>

と唱えながら、鎚でキーラを打っていると観想する<sup>(24)</sup>。

北東の角からはじめて、マンダラの外側の金剛杵輪のさらに外側にあたる火炎輪<sup>(25)</sup>の八箇所で、右まわりに移動しながら<sup>(26)</sup>、キーラをさして鎚でこれを打つ。はじめに師(ācārya：阿闍梨)が実行し、もし師ができなければ、つづいて各門の師<sup>(27)</sup>(dvārācārya)が行う。

ウシュニーシャチャクラヴァルティンUṣṇiṣacakraṃvartinのキーラは、東のキーラのさらに東に、スンバSumbhaのキーラは、西のキーラのさらに西に打て。

もし『真実撰経』*Tattvasaṃgraha*などでは「外側の火炎輪にキーラを打て」と説かれているというならば<sup>(28)</sup>、現在の師たちは「マンダラの家屋の外でキーラを打ち、その上に十個の土塊を盛り、毎日、キーラの姿をした忿怒尊を花などで礼拝し、傘蓋やバリ(bali：下級の神々への施食供養)を供えて礼拝せよ<sup>(29)</sup>」と語っており、実際に行っている。このようにしてもさらにすぐれた成就<sup>(30)</sup>(siddhi)が達成される(T87, 2)ので問題はない。

以上のように、キーラをさし、鎚で打つことによって妨害者の群れが大楽(mahāsukha)とありのままの状態(tathatā：真如)とひとつのもの(ekarasa：一味)になったと確信せよ。他の妨害者たちもはるかかなたに逃げ去ったと確信せよ。このように、上方も下方も四方も、鉄圍山<sup>(31)</sup>(cakravāḍa)に至るまで、世界のすべてのところから妨害者が取り除かれたと固く確信せよ<sup>(32)</sup>。

以上が第一の方法である。

## 第二の方法

あるいはまた、

oṃ āḥ hūṃ yamāntakṛt sarvaduṣṭa-indro(S15a)pendrān saparivārān kīlaya hūṃ phaṭ  
(つづいて、yamāntakṛtとindropendrānの二語を別の語に置きかえた九種のマントラがテキストにはあげられる。yamāntakṛtのところには、prajñāntakṛt, padmāntakṛt, viḡhnaantakṛt, acala, ṭakkirāja, niladaṇḍa, mahābala, cakravartin, sumbhaの各忿怒尊の名称が、indropendrānのところには、yamān, nāgān, kuberān, īśānān, agnīn, nairṛtīn, vāyūn, arkacandramahān, pṛthivīdevatāḥの各護方神の名称が順に挿入される)

というマントラとともに、東をはじめとする各方角で、インドラ等の姿をした妨害者にキーラをさし、鎚で打つ。他の部分は前節(=第一の方法)と同じである。

以上が第二の方法である。

### 補足説明

四維においてのみ四本のキーラを打つという説がある。四門においてのみ〔四本のキーラを打つ〕という別の説もある<sup>(33)</sup>。

忿怒尊たちやインドラなどの〔妨害者の〕身体の色や姿などに関しては、『口伝の華鬘』*Ām-nāyamañjari*を参照せよ。守護輪(rakṣācakra)の詳細な観想法も<sup>(34)</sup>〔同書を参照せよ〕。

また、カディラ樹などで作ったキーラ(T87, 3)が入手できない場合でも、説明したとおりの観想法によってキーラをさし、鎚で打ったうえで、てのひらを上に向けた手を裏返ししながら、

oṃ vajra hūṃ

と唱え、地面をおさえながら、同じように〔妨害者がとりのぞかれたと〕確信せよ<sup>(35)</sup>。

以上が妨害者にキーラを打つ儀軌である。

### 註

(1. はじめに)

- (1) 「結界」という語を宗教学的、民俗学的に使用したのは、垂水稔氏である(1978a, 1978b)。結界についての同氏による論考は垂水(1990)にまとめられている。
- (2) 初期、中期の漢訳經典や図像資料にみられる結界の表現方法については、眞鍋氏によるすぐれた研究がある(1969)。
- (3) 日本密教で用いられる金剛槩については岡崎(1984: 188)参照。
- (4) キーラについての考察は、これまでHummel(1952)やMeredith(1967)らによってなされているが、いずれもチベットでの用例に限られ、インドのキーラへの言及はない。
- (5) たとえば『尊勝仏頂修瑜伽法軌儀』(大正蔵, No. 973, p. 375bc)には請雨法が、『広大宝楼阁善住秘密陀羅尼經』(大正蔵, No. 1006, p. 641b)には止雨法がそれぞれ説かれる。
- (6) 『一字仏頂輪王經』(大正蔵, No. 951, p. 236c), 『大威力烏樞瑟摩明王經』(大正蔵, No. 1227, p. 144a)など。
- (7) 守護輪の観想については羽田野(1957: 42-44)参照。
- (8) 十忿怒尊の図像学的徴と、インド、チベット、ネパールでの表現方法のちがいについては森(1991b)を参照。
- (9) 観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラの関係については森(1992b)参照。
- (10) Bhattacharyya(1972)によるNPYのサンスクリット・テキストには明らかな誤りが多数含まれる。ここではBühnemannと立川武蔵の両氏によって写真複製された、ネパール国立古文書館所蔵の写本(1991)も参照した。
- (11) NPYのマンダラ外郭部の観想法と類似した内容が*Sādhanamālā*第97番, 第239番などにもあらわれる(Bhattacharyya 1968: 195, 458-459)。

- (12) VAの50項目については森(1991a:54-55)参照。  
 (13) ヒンドゥー教の護方神(あるいは護世神)については石黒氏による論考がある(1986)。  
 (14) 北村太道氏によって、チベット仏教におけるマンダラ結界法が報告されている(1986)。VAの方法とも多くの共通点を含み興味深い。  
 (15) NPYの記述は以下のとおりである(Bhattacharyya 1972:24)。

忿怒に満ちあふれ、劫の終わりの炎のように燃えさかり、世界中の妨害者の群れを飲み干すようである。身色は青で、中央が青、右が黄色、もう一方(左)が緑で、いずれも大きな口をあけたすさまじい三つの面を有し、牙をむき舌をだらりとたらしめて威嚇する。各々の面にはしかめた眉と赤く丸い三眼を持つ。額には五つの頭蓋骨の環、首には血の滴る50の人頭をつなげた首飾りをぶら下げ、六種の装身具を身につける。褐色の髪には青いアナンタ Anantaを巻き付け、赤いタクシャカ Takṣakaは耳飾りにし、蓮糸のように白いマハーパドマ Mahāpadmaは環珞にし、ダルバ草のような緑色をしたカルコータカ Karkottakaは聖紐にし、白いヴァースキ Vāsukhiは腰紐にし、黒く美しいパドマ Padmaは足輪にし、黄色いシャンカパーラ Śaṅkhapālaは腕釧にし、煙のような雑色のクリカ Kulikaは臂釧にして巻き付ける。金剛薩埵 Vajrasattva [の像]を印としてつける。金剛杵と金剛鈴を持った両手で降三世印 (trailokyavijayamudrā)を結びながら自らと同じような姿を持つ明妃を抱擁する。[残りの]右の二臂には鉤と綱索を、左の二臂にはカパーラ (kapāla)とカトヴァーンガ (khaṭvāṅga)を持つ。

- (16) この部分については白石・酒井両氏による翻訳がある(1958)。  
 (17) サンスクリット・テキストは Lokesh Chandra (1981:23-24)、チベット訳テキストでは TTP, No. 17, Vol. 2, 44,4,1-5,3。  
 (18) 訳注(34)参照。  
 (19) 十忿怒尊の系統間の図像的特徴のちがいは森(1991b)参照。  
 (20) 上部に忿怒尊を形どったキーラは、チベットでの実際の作例にしばしばみられるものである。Huntington (1975)はこのようなキーラ(チベット語では phur bu)の作例を多数紹介する。また Karmayはチベットのボン教徒たちによるキーラの用法を紹介する(1975:198)。  
 (21) 訳注(21)(22)参照。

## (2. 和訳)

- (1) 同論文で(13)としてあげたサンスクリット写本(Lokesh Chandra 1977b)は、カトマンドゥ市にある国立古文書館(National Archives)が所蔵する写本(No. 3-402, 同論文では(1)として表示)を直接筆写したものであると考えられる。また、田中公明氏(1991:180-181)によって報告されたVAのサンスクリット写本の断片は、国立古文書館蔵の不完全な写本(No. 4-20, 同論文では(8)として表示)の欠落部分の一部である。なお、田中氏からは、拙論で世界宗教高等研究所(IASWR)所蔵として示した写本(MBB-I-6)を、同研究所「所蔵」ではなく「撮影」とすべきことを御指摘いただいた。
- (2) Abhayākaraguptaの三部作VA, NPY, *Jyotirmañjarī*と類似の内容をもつ *Ācāryakriyāsamuccaya*には、Vighnakīlanavidhiに対応する章も含まれる。章名は同じVighnakīlanavidhiである(カトマンドゥの国立古文書館所蔵のサンスクリット写本(No. 4-123)では18b, 1-19b, 2——ただし第19葉は写本の一部が破損している——, Lokesh Chandraの影印版(1977a)では77,1-79,1がその該当箇所である)。両者の異同はつぎのとおりである。「はじめに」であげた8項目のうち、(3)

の十忿怒尊の観想, (4)のキーラに関する説明, (7)の第二の方法はまったく同じ文章があらわれる。(1)の金剛網などの観想はVAよりも簡略な記述であるが、ほぼ同一の内容を述べる。(2)のヴァジュラフーンカーラの観想のかわりに *Ācāryakriyāsamuccaya* では、描かれるマンダラの中尊を観想するよう説かれる。したがってVAにみられたような観想の対象に関する具体的な特徴の記述は含まれない。(5)の第一の方法に対応する部分は同書には説かれていない。(6)の妨害者がとりのぞかれたことの確認も *Ācāryakriyāsamuccaya* にはあらわれないが、VAが「現在の師たち」のことばとしてあげるキーラの供養が、(7)の第二の方法のあとに説かれる。(8)の補足説明は、キーラが入手できない場合の結界法のみが、やはり章の最後に述べられている。なお、*Ācāryakriyāsamuccaya* は森(1991a)では *Vajrācāryakriyāsamuccaya* と表記したが、Vajraの語を除いた方が適切であることを吉崎一美氏より御教示いただいた。

- (3) 持金剛はインド後期密教、とくに *Kālacakratāntra* 以降にあらわれた最高神格。Vajradharaともよばれる。VAの帰敬偈には持金剛に対する帰依文もふくまれる (TTP, Vol. 80, 81, 1, 2)。
- (4) 「ラン」(raṃ) は太陽や四大元素のひとつである火を象徴するために、しばしば用いられる種子マントラ (bijamantra) である (立川 1986: 76)
- (5) 二重金剛杵は文字どおりには「すべての方向に先端を向けた金剛杵」であるが、一般的には二つの金剛杵を十字に組みあわせた形で表現される。漢訳經典では「毘首金剛杵」と音訳され、日本では「羯磨杵」とよばれることが多い。
- (6) ツォンカパ Tsong kha pa は『真言道次第』 *sNgags rim chen po* の中で、これらの金剛塔等の位置関係をつぎのように述べる。(TTP, Vol. 161, 107, 3, 7)

金剛塔を四方に、その上には〔金剛〕網を、その下で金剛塔の上には金剛の天蓋を、外側には矢の束を観想する。

この記述は、おそらくNPYの第1章「文殊金剛マンダラ」の冒頭にある、観想上のマンダラの外郭部の説明にもとづくものであろう (「はじめに」参照)。

ツォンカパは、さらに同書で金剛塔等の観想と実際にキーラを打つというふたつの行為の順序についてもつぎのように述べている (107, 4, 8-5, 2)。

*Vajrāvālī* と『サンヴァラ・ウダヤ・タントラ註』には、金剛塔などを観想したあとでキーラを打つよう述べているのに対し、Dipaṅkarabhadra, Dārikapāda, Kṛṣṇacārinなどは、キーラを打ってから金剛塔等を観想するとし、Kambalaは〔金剛塔等を〕二度、観想するようお説きになっている。

VAと同様に金剛塔などを観想してからキーラを打つと説く『サンヴァラ・ウダヤ・タントラ註』とは、Ratnarakṣitaによる *Śrīsamvarodaya-mahātāntrarājasya padmīnī-nāma-pañjikā* (TTP, No. 2137, 該当箇所はVol. 51, 96, 3, 5ff.) と考えられる。同書に説くキーラを用いた結界法はVAのそれとパラレルな部分も多く、時代的に見て著者のRatnarakṣitaはAbhayākara Guptaよりも遅れることから、VAを参照して執筆されたとも推測される。これらとは逆に、キーラを打ってから金剛塔などを観想するDipaṅkarabhadra, Dārikapāda, Kṛṣṇacārinによる著作とは、順に *Śrīgūhyasamājamaṇḍalavidhi* (TTP, No. 2728, Vol. 65, 38, 4, 8ff), *Śrīcakrasamvaramaṇḍalavidhi-tattvāvatāra* (TTP, No. 2146, Vol. 51, 165, 1, 2ff), *Śrīgūhyasamājamaṇḍalopāyikā* (TTP, No. 2683, Vol. 62, 43, 5, 6ff) を指す。このうち、はじめのDipaṅkarabhadraによるマンダラ儀軌は『マンダラ儀軌四百五十頌』ともよばれ、Ratnākaraśāntiによる注釈書 (TTP, No. 2734) とともに、VA執筆の際、Abhayākara Guptaの情報源として重要な役割をはたした文献である (森 1992a)。金剛塔等の観想を二回行うように説くKambalaの著作は *Śrīcakrasamvaramaṇḍa-*

*loṭpāyikā-ratnapradīpodyota* (TTP, No. 2161, Vol. 51, 191,1,8ff; 191,3,3ff.) である。

このほかにも Vanaratna の *Trayodaśātmaka-śricakrasamvaramaṇḍalopāyikā* (TTP, No. 2204, Vol. 52, 5,5,7ff.), Durjayacandra の *Suparigraha-nāma-maṇḍalopāyikā* (TTP, No. 2369, Vol. 56, 145,1,1ff.) の各マンドラ儀軌でも, VA などと同様に, 金剛墻等の観想を行ってからキーラを打つよう述べている。

- (7) 金剛薩埵, トライローキヤヴィジャヤ, ヴァジュラフーンカーラの三尊の関係については「はじめに」参照。なお, チベット訳では「ヴァジュラフーンカーラという異名をもつトライローキヤヴィジャヤ」となっている (86, 4, 8)。
- (8) 二重蓮華も二重金剛杵と同じく, 文字どおりには「あらゆる方角に花卉をむけた蓮華」であるが, 実際の図像例では上下の二方向に花卉を開いた蓮台で表現される。
- (9) バイラヴァはヒンドゥー教の神シヴァ Śiva が忿怒形をとったときの名称である (立川 1977: 268)。カーララートリもシヴァの配偶神であるウマー Umā の異名のひとつである (Lal 1980: 138)。ヴァジュラフーンカーラがバイラヴァとカーララートリを足の下に踏むのは, ヴァジュラフーンカーラと同一視されるトライローキヤヴィジャヤがマヘーシュヴァラ Maheśvara (自在天) とウマーを踏むという, ヨーガ・タントラ以来の伝統にしたがったものである。仏教の神がみ, とくに忿怒形の尊格がヒンドゥー教の神を足の下におくことの意味については, 立川武蔵氏による考察がある (1977: 272-3)。
- (10) 展右とは, 左ひざを曲げ右足をその反対方向にのばして立つ姿勢である。展左 (pratyāliḍha) は左右の足のかたちを逆にした姿勢である。
- (11) インドの時間論では, 宇宙は周期的に発生, 持続, 消滅をくりかえす。劫はこの周期のもっとも大きな単位である。劫の終わり, すなわち世界の破滅においては, 世界を焼き尽くす炎があらわれると考えられた。
- (12) *Āmnāyamañjarī* に含まれるヴァジュラフーンカーラの特徴の記述の中の「六種の装身具」(ṣaṅmudrā) に対応する箇所では, 「美しい女性の骨で作った輪, 耳飾り, 首飾り, 腕釧, 人頭の輪によって飾られる」(yid du 'ong ba'i ma'i yus pa'i rang bzhin gyi 'khor lo can dan rna rgyan dang phyag gdub dang mgo bo'i ske rags kyis brgyan pa) と五種類の装身具を Abhayākara Gupta はあげている (TTP, No. 2328, Vol. 55, 163,1,3)。『真言道次第』の中では, ツォンカパは「輪などの六種の装身具」('khor lo la sogs pa'i phyag rgya drug) と言いかえている (107, 4, 2)。「六種の装身具」には首飾り, 腕釧, 宝石, 腰帯, 灰 (からだに塗る), 聖紐 (yajñopavīta) の六種があげられることもある (Liebert 1976: 257)。
- (13) 「はじめに」の注(15)にあげたように, NPY 第11章「ヴァジュラフーンカーラ・マンドラ」では, 八匹のナーガの王の名称すべてと, それぞれがどのような装身具として用いられているかが詳しく述べられている。アナタもこの中に含まれる。八匹のナーガの王は NPY 第21章「法界語自在マンドラ」ではマンドラの中の諸尊としてマンドラの外周におかれている (森 1989: 250)。
- (14) 金剛拳は, ここでは尊格の手などを指す語として用いられ, 特定の印 (mudrā) を指す語ではない。
- (15) ここで定義される降三世印は, インドで発掘されるトライローキヤヴィジャヤやヴァジュラフーンカーラの実際の造型作品においても見ることができる (逸見 1935: 230, 森 1990: 72-73)。日本の降三世明王も類似の印を結ぶ。ヴァジュラフーンカーラの名を冠したヴァジュラフーンカーラ印 (金剛吽迦羅印) も伝えられるが, 降三世印とは若干形態が異なり, チャクラサンヴァラなどが示す印に似た形態を示す。
- (16) キーラの長さに関する規定は, 「はじめに」でふれた漢訳經典の他にも, いくつかのタントラ經典やマンドラ儀軌において見出される。*Guhyasamājatantra* は 8 アングラの (Matsunaga 1978:

- 68), *Vajramālatantra* (TTP, No. 82, Vol. 3, 222, 4, 7) は12アングラのキーラをそれぞれ説く。Nāgabuddhiによる *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikāviṃśatīvidhi* (TTP, No. 2675, Vol. 62, 12, 5, 6), Jayabhadraの *Śricakrasamvaramaṇḍalopāyikā* (TTP, No. 2192, Vol. 51, 278, 4, 7) は8アングラ説, Dārikapādaの前掲書 (165, 1, 2) は12アングラ説を紹介する。Durjayacandraは18アングラ, 12アングラの二説をあげ (No. 2369, 145, 1, 2f.), それぞれ幅が6アングラ, 4アングラであるとする。これはVAの規定にも一致している。
- (17) キーラの材質としてあげられるカディラ樹, 骨, 鉄の三種は, すでに *Guhyasamājatantra* にもあらわれる (Matsunaga 1978: 68)。Durjayacandraのマンガラ儀軌にも同じ三種の素材が登場する (145, 1, 3)。
- (18) キーラに白芥子と赤梅檀が塗られ, 赤い花輪が結わえられることはDārikapāda (165, 1, 2f.) も, また五色の糸が巻かれることはNāgabuddhi (12, 5, 6) もそれぞれ述べていることが, 『真言道次第』の中で指摘されている (108, 1, 3f.)。ツォンカパによる言及はないが, Nāgabuddhiの著作にはキーラを香や花で供養する記述も含まれる (12, 5, 6f.)。赤梅檀が塗られ, 赤い糸と花輪がキーラに結わえられることは, Nāgārjunaに帰せられるマンガラ儀軌 *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi* (TTP, No. 2663, Vol. 61, 267, 1, 7f.) にも見出される。
- (19) 忿怒尊が持つキーラの上の部分をもどのような形に観想するかは, 諸文献のあいだで必ずしも一致していないが, 特定の尊格のすがたをとることは多くの文献に説かれている。ツォンカパはこれについて『真言道次第』の中でつぎのように述べている (107, 5, 7-108, 1, 2)。

〔キーラの上下の部分が〕どのような形をしているかについては, 同書 (=VA), Nāgabuddhi (TTP, No. 2675, 12, 5, 8), Śrīdhara (TTP, No. 2280, 197, 1, 4f.) に「観想する時は上は忿怒尊のすがたをとり, 下は先端がとがっていると観想する」と説明されているのをのぞいて, 明らかにはされていない。〔Abhayākaraguptaは〕『灌頂論』 *Abhiṣekaparakaraṇa* (TTP, No. 2214, Vol. 52, 35, 1, 8) の中では「上は各々の忿怒尊のすがたをとり, 下は先端のとがった十本〔のキーラ〕」と, またLilāvajraも「キーラの上の部分は忿怒尊で, 下の部分は独鈷金剛杵である」とお説きになっている (該当箇所不明)。〔キーラの〕中心より上の部分を観想する場合, 観想するよう説かれた〔キーラを持つ〕忿怒尊のいずれかのすがたを, また「中心より下の部分は独鈷金剛杵のかたちをとる」とŚāntipa (=Ratnākaraśānti) もお説きになっているので (TTP, No. 2734, Vol. 65, 158, 3, 2) このように観想せよ。

どの尊格のすがたにするかについても, ツォンカパはこの少しあとでつぎのように述べる。

キーラを生む方法については, 尊格それぞれのすがたにする場合と, そうではなく〔一尊だけに〕する場合の二説がある。同書 (=VA) と〔Ratnarakṣitaの〕『サンヴァラ・ウダヤ・タントラ註』 (TTP, No. 2734, 96, 4, 4f.) の説は, キーラをそれぞれ十忿怒尊各尊とし, Kambala (TTP, No. 2161, 191, 2, 7) とPrajñārakṣita (TTP, No. 2186) と考えられるが該当箇所なし) もキーラを8尊の女尊とし, 〔前者の〕各尊とする立場をとる。NāgabuddhiとDārikapāda (TTP, No. 2146, 165, 1, 3) は〔複数の〕キーラをヴィグナータカ一尊に, Śrīdhara (TTP, No. 2880, 197, 1, 5) はカドガヤマーリKhadgayamāri〔一尊〕にするので, 〔後者の〕各尊とはしない立場である。Dīpaṅkarabhadra (TTP, No. 2675, 38, 4, 8) はキーラ自体も一本しかお説きになっておらず, その尊格はヴィグナータカとされている。

ツォンカパによる言及はないが, 複数のキーラの上の部分特定の尊格一尊に観想する説としては, ヴィグナータカとしばしば同一視されるアマリタクンダリンAmṛtakuṇḍalin (甘露軍荼梨) がこの一尊に選ばれるテキストもいくつかある。Kṛṣṇacārin (TTP, No. 2683, 43, 5, 6f.),



- Divākaracandra (TTP, No. 2390, 224, 4, 3) による各マンダラ儀軌や、『秘密集会タントラ』の聖者流に属する、Nāgārjunaの *Piṇḍīkṛtasādhana* (Poussin 1896: 1), Candrakīrtiの *Pradīpodyotana* (TTP, No. 2650, Vol. 60, 26, 2, 4f.) などがこれにあたる。Vanaratnaのマンダラ儀軌 (TTP, No. 2204) では、十忿怒尊のうち下方に位置するスンバラージャがキーラの形に選ばれている (6, 1, 4)。『真言道次第』のあとの部分の引用でツォンカパがあげている Nāgabuddhiのマンダラ儀軌 (TTP, No. 2675) では、実際はヴィグナータカは登場せず、尊名としては「ヴァジュラ・アムリタVajrāmṛta」という名称があげられている (13, 1, 1)。その形態は「上の部分は忿怒尊のすがたをし、三面六臂である」と述べられている (13, 1, 2)。伝Nāgārjunaのマンダラ儀軌 (TTP, No. 2663) ではキーラの上の部分の尊名は特定されていない (276, 1, 7f.)。
- (20) 十忿怒尊の右の第一臂の持物 (あるいは印) を指す。ヤマーンタカから順に金剛鉤、羂索、鎖、鈴、剣、降三世印、金剛杖、三叉戟、仏頂印、金剛杵である。
- (21) このマントラは『真実撰経』に登場する *oṃ vajrakīlaya sarvavighnān bandha hūṃ phaṭ* に由来すると考えられる (堀内 1983: 527)。このマントラはĀnandagarbhaによる金剛界マンダラ儀軌 *Sarvavajrodaya* にも登場するほか (密教聖典研究会 1986: 284), Jayabhadraによるマンダラ儀軌 (TTP, No. 2192, 278, 4, 7) やAbhayākara Gupta自身の著作 *Āmnāyamañjarī* (TTP, No. 2328, Vol. 55, 163, 5, 2) の結界法においても見出される。
- (22) ツォンカパが『真言道次第』において指摘するように (108, 2, 3f.), このマントラは『秘密集会タントラ』第14章を典拠とする (ただし『秘密集会タントラ』では *kāyavākcittam* の部分が *kāyavākcittavajrām* となっている)。VAと同じマントラは *Vajramālātāntra* (TTP, No. 82, 222, 4, 6 ff.), *Abhidhānottaratāntra* (TTP, No. 17, 43, 4, 7) などのタントラ経典, Ānandagarbha (TTP, No. 3339, 13, 5, 3f.; 密教聖典研究会 1986: 284), *Dīpañkarabhadra* (TTP, No. 2675, 38, 4, 7f.), Śrīdhara (TTP, No. 2880, 197, 1, 3) などによる数多くのマンダラ儀軌類にも登場する。
- (23) 同じマントラが *Vajramālātāntra* (TTP, No. 82, 222, 6, 1), *Abhidhānottaratāntra* (TTP, No. 17, 43, 4, 7), Vanaratnaのマンダラ儀軌 (TTP, No. 2204, 6, 1, 7), *Āmnāyamañjarī* (TTP, No. 2328, 163, 5, 2f.) に含まれる。
- (24) ツォンカパは、観想上のキーラをどの尊格が打つかについても『真言道次第』の中で言及している (108, 2, 8ff.). 同書によれば、注(19)であげた各キーラの上の部分に観想された忿怒尊がそれぞれのキーラを打つのであるが、『秘密集会タントラ』の聖者流では、キーラを打つのはスンバの役割となっている。このことは *Piṇḍīkṛtasādhana* (Poussin 1896: 1) や *Pradīpodyotana* (TTP, No. 2650, 86, 2, 2ff.) などの聖者流の文献で確認できる。Kṛṣṇacārinによるマンダラ儀軌でもこれは同様である (TTP, No. 2683, 43, 5, 6)。このほか、Vanaratnaのマンダラ儀軌では、キーラはスンバの形をしているが、打つのはカーカースヤー *Kākāsyā* などの 8 尊のダーキニー (*dākinī*) たちである。Śākyamitraによる『真実撰経』の注釈書 *Kosalālaṅkāra* (TTP, No. 3326) では、タツキラージャがキーラを打つよう規定されている (5, 1, 3f.)。
- (25) 金剛杵輪と火炎輪はマンダラの最外周の帯である。Abhayākara Guptaが説くマンダラ計測法によれば、マンダラ全体を直径96単位 (*mātra*) の円とした場合、一番外側から4単位分が火炎輪に、その内側の2単位分が金剛杵輪にわりあてられる。マンダラの計測法については、森 (1992b) を参照。
- (26) したがって、キーラを打つ位置は、北東、東、南東、南、南西、西、北西、北、上、下の順になる。キーラを打つ順序については「はじめに」を参照。
- (27) 「門の師」(*dvārācārya*) はマンダラ制作過程と灌頂儀礼において、儀式的補助的な役割をは

たず僧侶である。

- (28) 『真実撰経』の中には該当する文章はふくまれないようである。
- (29) 花などによるキーラの供養はRatnarakṣitaによる著作にも登場する (TTP, No. 2137, 96, 4, 6)。
- (30) 「成就」(siddhi:「悉地」とも音写される)は密教実践上の目的を指すことばとして、しばしば用いられる。宗教上の悟りばかりではなく、呪術的な儀礼によってもたらされる効果や、神通力のような超自然的な能力を指す場合もある。
- (31) 『俱舍論』*Abhidharmakośa*などに説かれる仏統的な仏教宇宙観において、世界の最外周をとりかこんでいると考えられた鉄でできた山脈。
- (32) *Nāgabuddhi*もその著 (TTP, No. 2675)において、結界法のさいごに妨害者を取り除いたという確信を持つよう述べている (13, 1, 4ff.)。VAのこの段落と類似の内容は*Vanaratna*によるマングラ儀軌 (TTP, No. 2204)にもあらわれる (6, 1, 6f.)。
- (33) 『真言道次第』(108, 3, 3)によれば、四門で四本のキーラを打つという説はJayabhadraのマングラ儀軌 (TTP, No. 2192)にふくまれる (278, 4, 6)。このほかに、キーラを一本しか用いない方法を『文殊金剛マングラ儀軌根本註』(該当作不明)とDīpaṅkarabhadraのマングラ儀軌 (TTP, No. 2675, 38, 4, 7ff.)が、また中央に一本とまわりに四本の合計五本のキーラを打つという方法を*Lilāvajra*と*Divākaracandra* (TTP, No. 2390, 224, 4, 4ff.)の両者が説くことをツォンカパは指摘している (108, 3, 3f.)。なおĀnandagarbhaも*Sarvavajrodaya*の中で、中心と四隅に合計五本のキーラを打つ説をあげている (密教聖典研究会 1986: 284)。
- (34) 十忿怒尊の特徴についての*Āmnāyamañjari*の該当箇所はTTP, 163, 2, 2-4, 5である。これと同じ特徴を持つNPYの第三章中の十忿怒尊の持物については森 (1991b: 表1) 参照。
- (35) ツォンカパは『真言道次第』の中で、Abhayākaraguptaがここで述べている、キーラを用いない結界法は、*Durjayacandra*にしたがったものであると述べる (108, 4, 1f.)。実際、*Durjayacandra*のマングラ儀軌 (TTP, No. 2369)には類似の記述がある (145, 1, 4f.)。ツォンカパはさらにJayabhadraによる「三味のキーラによって〔妨害者を〕打つ」(TTP, No. 2192, 278, 4, 8)という記述もこの方法に関連づけている (108, 3, 2f.)。

## 付 記

本稿は平成三年度科学研究費補助金による研究成果の一部である (奨励研究A「コンピューターを利用したインド密教儀礼の文献学的研究」課題番号0371008)。資料の収集にあたっては、庭野平和財団より平成二年度研究助成を受けた (研究課題「ネパールにおける仏教儀礼の変容に関する研究」)。

## 略 号

NPY : *Niṣpānmayogāvalī*

TTP : 『大谷大学図書館所蔵影印北京版西藏大蔵経』 鈴木学術財団。

VA : *Vajrāvalī-nāma-maṅḍalopāyikā*

大正蔵 : 大正新脩大蔵経

## 参考文献

チベット語文献

- Abhidhānottaratāntra*, TTP, No. 17, Vol. 2, 40,5,3-93,2,7.  
*Vajrāmṛtatāntra*, TTP, No. 74, Vol. 3, 143,11,3-147,3,8.  
*Śrīvajramālabhidhānamahāyogatantrasarvatāntrahṛdayarahasyavibhāṅga*, TTP, No. 82, Vol. 3, 203,2,1-231,4,2.  
*Sarvatathāgatakāyavākiccittarahasyo guhyasamāja-nāma-mahākālparāja*, TTP, No. 81, Vol. 3, 174,3,5-203,1,8.  
*Sarvatathāgatattvasaṃgraha-nāma-mahāyānasūtra*, TTP, No. 112, Vol. 4, 217,1,1-283,2,2.  
 Abhayākara Gupta, *Abhiśekaparakaraṇa*, TTP, No. 2214, Vol. 52, 34,1,7-45,5,3.  
 —, *Āmnāyamañjarī* TTP, No. 2328, Vol. 55, 105,1,1-249,1,6.  
 Ānandagarbha, *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-sarvavajrodaya* TTP, No. 3339, Vol. 74, 1,1,1-25,2,8.  
 —, *Śrīguhyasamājapañjikā*, TTP, No. 2780, Vol. 66, 179,1,1-219,1,6.  
 Kambala, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalopāyikā-ratnapradīpodyota*, TTP, No. 2161, Vol. 51, 189,5,5-201,1,8.  
 Kṛṣṇa, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2683, Vol. 62, 43,4,3-49,2,4.  
 Candrakīrti, *Pradīpodyotana-nāma-tīkā*, TTP, No. 2650, Vol. 60, 23,1,1-117,3,7.  
 Jayabhadra, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2192, Vol. 51, 274,4,8-288,2,5.  
 Dārikapāda, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalavidhi-tattvāvātāra*, TTP, No. 2146, Vol. 51, 164,1,7-171,5,2.  
 Dīpañkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2728, Vol. 65, 35,3,6-44,1,2.  
 Divākara Candrapāda, *Śrīherukabhūta-nāma-maṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2390, Vol. 56, 222,4,7-246,4,6.  
 Durjayacandra, *Suparigraha-nāma-maṇḍalopāyikāvidhi*, TTP, No. 2369, Vol. 56, 142,2,4-154,1,4.  
 Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikāvīṅśatīvidhi*, TTP, No. 2675, Vol. 62, 12,1,4-18,3,6.  
 Nāgārjuna, *Piṇḍīkramasādhana*, TTP, No. 4788, Vol. 85, 271,1,1-277,1,6.  
 —, *Piṇḍīkṛtasādhana*, TTP, No. 2661, Vol. 61, 267,1,1-273,1,6.  
 —, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No. 2663, Vol. 61, 275,1,7-284,1,3.  
 Prajñārakṣita, *Śrīcakrasamvaramaṇḍalavidhi-saṃgraha*, TTP, No. 2186, Vol. 51, 262,4,1-268,1,6.  
 Ratnarakṣita, *Śrīsamvarodayamahātāntrarājasya padmīnī-nāma-pañjikā*, TTP, No. 2137, Vol. 51, 71,1,1-119,2,6.  
 Ratnākaraśānti, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi-tīkā*, TTP, No. 2734, Vol. 65, 141,2,6-178,3,7.  
 Vanaratna, *Trayodaśātmaka-śrīcakrasamvaramaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2204, Vol. 52, 5,2,7-15,3,7.  
 Śākyamitra, *Kosalālaṅkāratattvasaṃgraha-tīkā*, TTP, No. 3326, Vol. 70, 189,1,1-Vol. 71, 94,2,6.  
 Śrīdhara, *Śrīraktayamārimaṇḍalopāyikā*, TTP, No. 2880, Vol. 57, 196,3,7-204,3,8.  
 Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *rGyal ba khyab bdag-rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa, "gSang ba kun gyi gnad rnam par phye ba"* (sNgags rim chen po), TTP, No. 6210, Vol. 161, 53,1,1-226,2,7.

## 欧文および和文文献

Bhattacharyya, Benoytosh

1968(1925) *Sādhnamālā*. Vol. 1, G.O.S., No. 26. Baroda: Oriental Institute; Vol. 2, No. 41.1972(1949) *Niṣpannayogāvalī of Mahāpāṇḍita Abhayākara Gupta*, G.O.S., No. 109. Baroda: Oriental Institute.

Bühnemann, G &amp; M. Tachikawa

1991 *Niṣpannayogāvalī, Two Sanskrit Manuscripts from Nepal*. Bibliotheca Codicum Asiaticorum 5. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies.

Gonda, J.

1980 *Vedic Ritual, The Non-Solemn Rites*. Leiden: E.J. Brill.

羽田野伯猷

1958 「Tantric Buddhismにおける人間存在」『東北大学文学部研究紀要』9: 1-79。

逸見梅栄

1935 『印度に於ける礼拝像の形式研究』東洋文庫。

堀内寛仁

1983 『初会金剛頂経の研究』(上) 高野山密教文化研究所。

Hummel, Siegbert

1952 Der lamaistische Ritualdolch (phur-bu) und die alt-vorderorientalischen 'Nagelmenschen'. *Asiatische Studien* 6: 41-51.

Huntington, John C.

1975 *The Phur-pa, Tibetan Ritual Daggers*. Artibus Asiae Supplementum No. 33. Ascona: Artibus Asiae Publishers.

石黒 淳

1986 「ヒンドゥー教の護世神—バーダーミ第三窟前廊の天井装飾浮彫りをめぐって—」『論叢仏教美術史』(町田甲一先生古稀記念会編) 吉川弘文館, pp. 109-128。

Karmey, Samten G.

1975 *A General Introduction to the History and Doctrines of Bon*. The M.T.B. Off-prints Series No. 3. Tokyo: The Toyo Bunko.

北村太道

1986 「秘密集会マンダラの「地儀軌」について」『第一回チベット密教学問寺ギユメ調査報告書』清風学園, pp. 23-56。

Lal, Shyam Kishore.

1980 *Female Divinities in Hindu Mythology and Ritual*. Pune: University of Pune.

Liebert, Göesta

1976 *Iconographic Dictionary of the Indian Religion*. Studies in South Asian Culture Vol. 5. Leiden: E.J.Brill.

Lokesh Chandra (reproduced)

1977a *Kriyāsamuccaya*. Śatapiṭaka-Series, Indo-Asian Literatures Vol. 237. New Delhi: International Academy of Indian Culture.1977b *Vajrāvalī*. Śatapiṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

1981 *Abhidhānottara-tantra*. Śatapiṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 263. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

眞鍋俊照

1969 「密教図像にみえる観想上の結界について」『南都仏教』23: 45-111。

Matsunaga, Yukei

1978 *The Guhyasamāja Tantra, A New Critical Edition*. Osaka: Toho Shuppan Inc..

密教聖典研究会

1986 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳(1)—」『大正大学総合仏教研究所紀要』8: 24-57。

森 雅秀

1989 「『完成せるヨーガの環』(*Niṣpannayogāvalī*) 第21章「法界語自在マンドラ」訳及びテキスト」『法界マンドラの神々(国立民族学博物館研究報告別冊 第7号)』(長野泰彦・立川武蔵編) pp. 235-282。

1990 「パラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』6: 69-111。

1991a 「インド密教における建築儀礼—*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā*和訳(1)—」『名古屋大学文学部研究論集』111: 53-73。

1991b 「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受容と変容3 チベット・ネパール編』(立川武蔵編) 佼成出版社, pp. 293-324。

1992a 「『ヴァジュラーヴァリー』と『マンドラ儀軌四百五十頌』」『印度学仏教学研究』40 (1992年3月刊行予定)。

1992b 「観想上のマンドラと儀礼のためのマンドラ」『日本仏教学会年報』57 (1992年8月刊行予定)。

Poussin, de la Vallee

1896 *Pañcakrama*. Gand: Universite de Gand.

酒井真典

1956 『チベット密教経理の研究』高野山出版社。

白石真道・酒井真典

1958 「初会金剛頂経降三世品の一節について」『密教文化』41・42: 99-118。

立川武蔵

1977 「密教へのアプローチ」『講座密教4 密教の文化』春秋社, pp. 260-281。

1986 「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』(町田甲一先生古稀記念会編)吉川弘文館, pp. 65-97。

田中公明

1990 「ネパールのサンスクリット語仏教文献研究(2)—NGMPPで新たに撮影された密教写本を中心として—」『東方』6: 177-187。

垂水 稔

1978a 「結界について (I) —日本の境界表示装置—」『国立民族学博物館研究報告』3(1): 63-94。

1978b 「結界について (II) —境界的結界—」『国立民族学博物館研究報告』3(4): 749-779。

1990 『結界の構造—一つの歴史民族学的領域論—』名著出版。